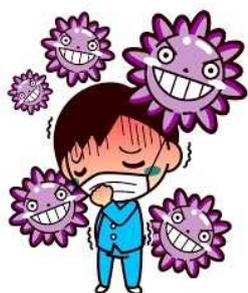


「心を鬼にして」

温かい正月でしたが、いざ3学期がはじまるとともに、学校では、インフルエンザが流行し、一気に寒くなったり、暖かくなったり体に応える日が続いています。しかしながら



2月4日は、立春です。暦の上では、春ということになります。前日の2月3日は「季節を分ける」という意味で節分です。この節分の日、豆まきをされるご家庭も多いのではないのでしょうか。もともとは、季節の変わり目には邪気(鬼)が生じるという意味で、鬼をはらうために豆まきが始まり、「豆(穀物)には生命力と魔除けの力が備わっていて、鬼に豆をぶつけて邪気を追い払い、1年の無病息災を願う。」のだそうです。季節の変わり目には、体調がすぐれないという事もあるので、こうした行事が行われてきたのかもしれない。「福はうち、鬼は外」

が一般的ですが、「福はうち、鬼はうち」とする地方もあると聞きました。鬼を祭っている地方では、鬼は人々を助けてくれる存在だそうです。よい鬼の話も実は、民話のなかには、たくさんあります。

鬼といえば、昔から学校やスポーツの世界では、「心を鬼にして」という言葉をよく使います。子どもたちの才能を开花させるため、「心を鬼」にして、指導しているのだといっています。しかし現在では、「誉めて育てる」「子どもの気持ちにそって話を聞く」等、どちらかというところ「心を鬼」にして厳しく接することは少なくなったように感じます。「心を鬼にする」のような鬼という言葉のつくことわざは、意外と多いのですが、この場合の鬼は、人の悪いところを、よくするための鬼で、人の心の持ち方を、たとえたものだそうです。相手のためを考え、心を強く持ち、相手をあまやかさないで、正しい方向を向かせるという意味があるようです。



今年度もあと2ヶ月となりました。6年間の小学校での育ちは大変重要です。子どもたちを指導する私たちにとっての基本は「社会で許されないことは学校でも許されな事」です。だから、毅然とした態度で指導することが多々あります。その子にあった方法で、「誉めて育て」「話をよく聞いて」しかし、たまには「心を鬼にして」追い込む時期です。これまでの児童一人ひとりの育ちを振り返り、あと2ヶ月で一番ベストな状態で進学、進級できるよう、教職員一同がんばります。ご家庭でもご協力よろしくお願いたします。



校長

土井 安博